

田小屋野貝塚 総括報告書

A report of excavation at Tagoyano-shell midden site

2016.3

TSUGARU-city Board of Education,
Aomori-Prefecture, Japan
青森県つがる市教育委員会

田小屋野貝塚総括報告書

2008～2015年度国庫補助事業市内遺跡発掘調査に伴う総括報告書

2016.3

青森県つがる市教育委員会

『田小屋野貝塚 総括報告書』正誤表

ページ	位置	誤	正
1	12行目	上下水道施設	上下水道敷設
13	5~6行目	(A-1~4号)	(A-1~4-6号)
65	7~8行目 8行目	平成26年度には遺跡西端部で 遺跡範囲内外に1ヶ所づつ	平成25年度には史跡西側で 2ヶ所の
93	30行目	上肢骨(図3) :	上肢骨(図2) :
	34行目	下肢骨(図4) :	下肢骨(図3) :
101	30行目	可能性があるため、	可能性があるため、
104	1行目	放射性年代測定ほか	放射性炭素年代測定ほか
118	26行目	平均値である(表8)。	平均値である(表9)。
124	5・8行目	塩塵	塩酸
	5行目	可能性のある部分を	可能性のある部分を
	9行目	炭塵カルシウム	炭酸カルシウム
	9・10・11行目	二重化炭素	二酸化炭素
	11行目	水素で還元し、	水素で還元し、
	17行目	シュウ塵	シュウ酸
	22行目	過去の大気中	過去の大気中
	23行目	として道る年代である。	として遡る年代である。
	126	史跡の北西隣接地	史跡の北東隣接地
	131	日本測地系(Tokyo Datam)	日本測地系(Tokyo Datum)



B トレンチ 1号竪穴建物跡（北東から）



B トレンチ 1号竪穴建物跡内下部貝層（北東から）

卷頭写真2 平成 24（2012）年度竪穴建物跡内貝塚出土地点の調査



A トレンチ 1 号竪穴建物跡（南西から）



A トレンチ 5 号遺構出土人骨（南から）

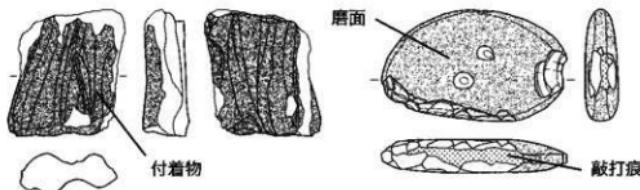
巻頭写真 1 平成 24 (2012) 年度人骨出土地点の調査

例 言

1. 本書は2008～2015（平成20～27）年度までにつがる市教育委員会が国庫補助及び県費補助を受けて実施した、市内遺跡発掘調査事業に伴う田小屋野貝塚の発掘調査報告書である。
2. 調査はつがる市教育委員会が担当し、佐野忠史（社会教育文化課学芸員）が主担当者となり実施した。
3. 本書は、つがる市教育委員会社会教育文化課が編集・執筆した。
4. 本書に掲載の写真撮影は佐野が、図版はつがる市教育委員会社会教育文化課職員及び作業員が分担して作成・撮影した。なお、遺物実測図の一部は、（株）パスコに委託して作成した。
5. 出土人骨の調査は、新潟医療福祉大学奈良貴史教授に委託した。
6. 自然科学分析は、パリノサーヴェイ株式会社に委託した。
7. 石器の石材鑑定は、川村眞一氏（日本地学教育学会会員）の肉眼鑑定によった。
8. 年代測定について、弘前大学小岩直人教授より（株）加速器分析研究所の測定データの提供を得た。
9. 本書の刊行に至るまで、下記の方々のご指導・ご協力を賜った（敬称略・順不同）。
文化庁文化財部記念物課 青森県教育庁文化財保護課 青森県立郷土館 NPO法人つがる縄文の会
五所川原市教育委員会 河田康博 小笠原雅行 萩城和穂 神昌樹 斎藤慶史 楢天唯正 中門亮太
福田友之 菊池徹夫 平澤毅 岡村道雄 辻誠一郎 小岩直人 奈良貴史 鈴木敏彦 吉田邦夫 宮越哲雄
本多貴之 伊藤山美子 小澤清男 関根達人 川村眞一 尾野史郎 小山内昭光 野呂弘 萩西和義
野呂良司 三橋勤 尾馬康徳 野呂康生 野呂實 野呂謙吾 野呂三嘉 野呂誠一 野呂秀彦 野呂篤司

凡 例

1. 遺構の番号は、調査年度・調査区ごとに、遺構の種別に関係なく、発見順の連番とした。
2. 図版については、それぞれ縮尺を示した。ただし、遺物写真については縮尺を統一していない。
3. 図中の座標は国土方眼座標第X系（世界測地系）の値であり、標高は東京湾中等潮位（T.P.）を基準とした値である。
4. 図中の層位は、基本層序をローマ数字（I・IIなど）、遺構覆土を算用数字（1・2など）で表記した。
5. 上層の色調は、「新版 標準土色帳」15版（小山ほか）を基準とした。
6. 土層注記にある、混入物・内容物の上層に対する割合は、以下のとおりである。
混入：40～50% 多量：25～30%程度 中量：15～20%程度 少量：5～10%程度 微量：5%未満
7. 遺物図に示すスクリートーンの指示は下記のとおりである。



はじめに

史跡に指定されている田小屋野貝塚は、亀ヶ岡石器時代遺跡などとともに、縄文遺跡の宝庫であるつがる市を代表する遺跡の一つであります。平成2・3年度に青森県立郷土館による史跡隣接地での調査が行われておりますが、これまで遺跡の内容が不明確であったため、つがる市では平成20年度から27年度にかけて、継続的に史跡内外で内容確認調査等を進めてまいりました。この度、その成果をまとめた総括報告書を刊行する運びとなりました。この報告書が、縄文時代前期から中期の北海道および北東北に花開いた「円筒土器文化」を理解する一助となることを願っています。

最後になりましたが、これまでに調査をはじめとする様々な面で指導に当たられました文化庁・青森県教育委員会・つがる市遺跡保存検討会の皆様や、調査地の地権者の皆様および周辺住民の皆様に深く感謝を申し上げます。

2016（平成28）年3月

つがる市教育委員会

教育長 葛西 崑輔

目 次

はじめに

例言・凡例

目次

第1章 遺跡と調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 遺跡の概要	3
第4節 調査の方法	7

第2章 過去の調査の概要

第1節 明治から昭和初期の調査	9
第2節 平成の青森県立郷土館による調査	9

第3章 平成20～27年度の調査

第1節 調査の目的	12
第2節 基本層序	12
第3節 史跡の内容確認調査	13
第1項 人骨出土地点（平成24年度）	13
第2項 竪穴建物跡内貝塚出土地点（平成24年度）	23
第3項 史跡西半の調査（平成25年度）	35
第4項 史跡東半の調査（平成26年度）	53
第5項 史跡南西の調査（平成24年度）	61
第4節 史跡周辺の範囲内容確認調査	65
第1項 史跡西側隣接地の調査（平成20・25年度）	65
第2項 史跡南西側隣接地の調査（平成24年度）	70
第3項 史跡北西側隣接地の調査（平成21年度）	78
第4項 史跡北東側隣接地の調査（平成23・26・27年度）	82

第4章 自然科学分析

第1節 人骨の分析	93
第1項 田小屋野貝塚出土人骨の形質人類学的分析	93
第2項 田小屋野貝塚出土人骨の炭素・窒素同位体分析と放射性炭素年代測定	100
第2節 田小屋野貝塚出土動物遺存体・炭化材種実同定と放射性炭素年代測定ほか	104
第3節 田小屋野貝塚出土貝殻の放射性炭素年代測定（AMS測定）	124
第5章 総括	126

引用参考文献

報告書抄録

奥付

第1章 遺跡と調査の概要

第1節 調査に至る経緯

つがる市西縁部に位置し、日本海沿岸部に南北に連なる屏風山砂丘地には、多くの縄文遺跡が所在する。北日本の縄文時代晩期の文化を示す「亀ヶ岡文化」の名称のもととなった亀ヶ岡遺跡とともに、縄文時代前期中葉から中期中葉にかけて北海道南部から東北北部に成立した「円筒土器文化」の貝塚を伴う集落跡である田小屋野貝塚もこの丘陵地帯に位置し、昭和19年6月26日にこれらの中核とされる部分が国史跡に指定された（つがる市教育委員会2009）。

しかし、両史跡ともその周辺の遺跡を含め、集落の内容には不明な点が多くあった。史跡周辺部については、平成2・3年に青森県立郷土館による史跡西側の調査が行われ、堆積土中に貝層が形成された竪穴建物跡1軒が確認された（福田・工藤1995）。のことから、史跡周辺部についても遺跡の良好な遺存状態が推定されていたが、調査は史跡隣接地域の西側一部分にとどまっていた。

このような状況下で、史跡を含む周知の埋蔵文化財包蔵地は宅地化や農地化、さらには上下水道施設計画が進行し、さらに周辺を見渡せば土砂採取行為が実施されているところも見受けられた。そのため、つがる市教育委員会では、田小屋野貝塚の史跡周辺部の埋蔵文化財包蔵地において平成20・21・23年度に試掘調査を実施し、遺跡の状況を把握するとともに、耕作深度や各種開発行為について適切に指導を行うためのデータを得ることとした。

こうした調査の結果、史跡北側隣接地や西側隣接地でも縄文前期から中期にかけての遺構群が確認されたことから、史跡範囲の追加指定を目指すとともに、史跡内部の貝層・遺構分布状況確認を目的とした調査を平成24～26年度にかけて実施した。

第2節 調査要項

1. 調査目的

遺跡の包蔵状態が不明なため、平成20・21・23・26・27年度に史跡周辺の周知の埋蔵文化財包蔵地で試掘調査を実施し、農耕深度や、個人零細事業者などの行う土砂採取等の各種開発行為に対し、適切な指導・回答を行うための資料を得るために調査を実施することとした。平成24～26年度にかけては、史跡内の状況が不明なため貝層や遺構の分布状況を確認し、将来の史跡の保存・整備に資することとした。

2. 調査期間及び調査地点等

平成20年度 調査期間：平成20（2008）年10月1日～11月28日

調査地点：つがる市木造館岡田小屋野59-32 調査面積：150m²

平成21年度 調査期間：平成21（2009）年9月1日～12月11日

調査地点：つがる市木造館岡田小屋野25-1（B・Cトレ）、48-22（Aトレ） 調査面積：130m²

平成23年度 調査期間：平成23（2011）年10月28日～11月21日

調査地点：つがる市木造館岡田小屋野5-7ほか（道路敷地ほか） 調査面積：110m²

平成24年度 調査期間：平成24（2012）年7月1日～12月14日

調査地点：つがる市木造館岡田小屋野5-13（Aトレ）、5-1（Bトレ）ほか 調査面積：250m²

平成25年度 調査期間：平成25（2013）年10月8日～12月6日

調査地点：つがる市木造館岡田小屋野5-10ほか 調査面積：266m²

平成26年度 調査期間：平成26（2014）年10月7日～11月7日

調査地点：つがる市木造館岡田小屋野3ほか 調査面積：155m²

平成27年度 調査期間：平成27（2015）年10月20日～10月21日

調査地点：つがる市木造館岡田小屋野35 調査面積：12m²

3. 調査主体者・調査組織等

調査主体者：

つがる市教育委員会（補助事業者 つがる市）

調査体制：

調査担当者・調査員 佐野忠史 つがる市教育委員会社会教育文化課学芸員

副担当 羽石智治 つがる市教育委員会社会教育文化課学芸員

調査指導機関：

文化庁文化財部記念物課・青森県教育庁文化財保護課

つがる市遺跡保存検討会 会長 村越 潔 弘前大学名誉教授・日本考古学协会会员（故人）

副会長 川村 真一 日本地学教育学会会员・

元青森県弘前工業高等学校校長

委員 小山内壽一 青森県文化財保護指導員

事務局：

つがる市教育委員会社会教育文化課（旧文化課） 文化財保護係

教育長 萩西幡輔（平成20年度～）

宮本裕士（平成22～24年度）

教育次長 半田 修（平成20～21年度）

三上みつる（平成27年度）

教育部長 野呂金弘（平成25～26年度）

須藤紳逸（平成22～23年度）

教育推進監 高橋和久（平成20～21年度）

工藤秀美（平成24～25年度）

小寺 保（平成21～22年度）

課長 須藤紳逸（平成20年度）

對馬誠貴（平成27年度）

三上みつる（平成23～26年度）

三浦貴彦（平成22～26年度）

課長補佐 對馬誠貴（平成20～21年度）

奈良陽一（平成24～25年度）

鳴海義仁（平成26～27年度）

係長 野呂有恵子（平成20～22年度）

蝦名紀子（平成23年度）

学芸員 佐野忠史 羽石智治

第3節 遺跡の概要

1. 田小屋野貝塚の位置と周辺の遺跡

つがる市は青森県の西部に位置し、253km²の面積を有する。市内には平成28年3月現在112ヶ所の周知の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。田小屋野貝塚（遺跡番号209001）はつがる市役所の北西約9.5kmに位置し、つがる市木造館岡田小屋野に所在する。

遺跡西部は岩木山北麓に連なる丘陵、日本海と並行して南北20km、東西4kmにわたり広がる屏風山砂丘地帯となっている。遺跡周辺は、砂丘地帯の台地を津軽平野に向かって東西方向に開析する谷によって、複数の尾根状地形が平行に並んでいる（佐野ほか2008）。

遺跡は西から東に向かって突き出した標高10~15mの台地平坦面から緩斜面上に立地し、0.7km東には山田川が、5.3km東には岩木川が流れる。遺跡の範囲は東西1.4km、南北0.4kmほどで、遺跡の南東隅が史跡に指定されている。また、沢を挟んだ南側には、史跡亀ヶ岡石器時代遺跡が隣接する。

田小屋野貝塚が営まれ始めた縄文時代前期中葉（約5,900年前）は、およそ9,000年前に始まる温暖化により、内陸に海が入り込む「縄文海進」の影響により、木造駅や五所川原市街地付近まで「古十三湖」が広がっていたとされる（つがる市教育委員会2015）。

遺跡の周辺には多数の遺跡が所在する（図1）。半径3km以内で、田小屋野貝塚の主たる時期と同じ縄文時代前・中期の遺跡としては、北側では畠縄遺跡（遺跡番号209010）、館岡屏風山(1)遺跡（同209011）、筒木坂屏風山遺跡（同209040）、南側では城西遺跡（同209015）、三好野(1)遺跡、（同209019）、江野島遺跡（同209006）がある。これらのうち、筒木坂屏風山遺跡では発掘調査が行われており、中期末から後期初頭の遺構・遺物が検出されている。

また、遺跡の北方約3.5kmには牛潟(1)・(2)遺跡がある。縄文時代前期末葉から中期初頭にかけての遺跡で、大型を含む竪穴建物跡や、フラスコ状土坑、道路跡とそれに直交して並列する土坑墓などが検出されており、円筒土器文化期の集落の内容・構成や規模などを知る上で貴重な資料となっている（佐野2009・2010a）。

遺跡の南方約10kmの旧森田村には石神遺跡がある。円筒下層a式土器から最花式まで連続的に土器が出土（江坂・村越1970）し、縦統的に営まれた円筒土器文化を代表する遺跡の一つである。平成以後の調査で、晚期との複合遺跡であることが明確になるとともに、円筒土器文化期の竪穴建物跡、土坑墓などの集落の様子が明らかになってきている。石神遺跡でも道路跡の脇から土坑墓が検出され、牛潟(1)・(2)遺跡と同様の状況が確認されている（佐野2008）。

本遺跡も前期中葉から中期末葉までの集落であることが明らかとなり、つがる市市域内での円筒土器文化期の重要な集落が点在している。

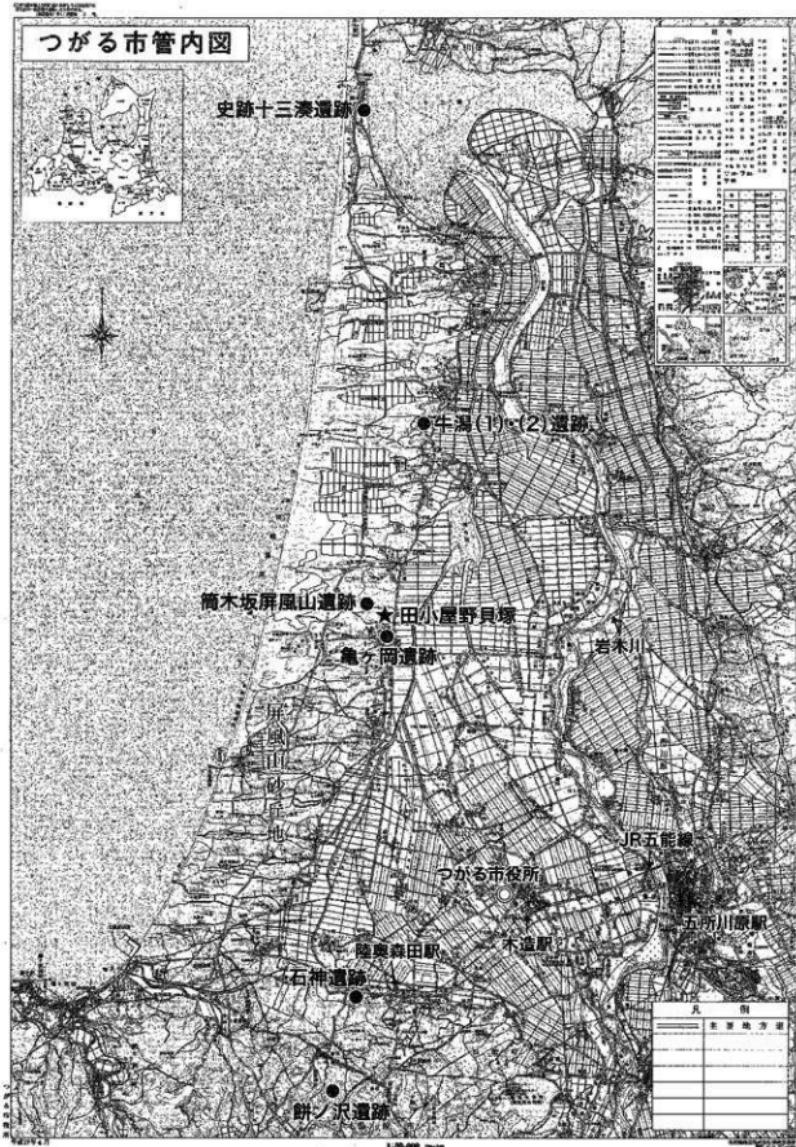


図1 田小屋野貝塚の位置図と周辺の遺跡（『青森県遺跡地図』（2009）などにより改変作成）

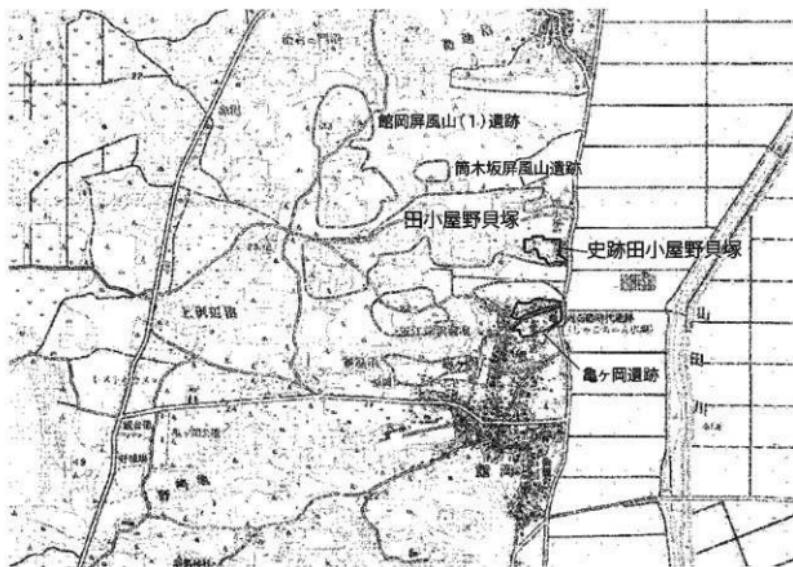


図2 田小屋野貝塚の位置(『青森県遺跡地図』(2009)などにより改変作成)



写真1 田小屋野貝塚遠景(南西から)

2. 遺跡周辺の地理的環境

『土地分類基本調査 金木』（青森県農林部農地計画課1994）によると、田小屋野貝塚の載る台地は、屏風山砂丘地の中位面（Gt II）と屏風山砂丘地の大半を占める被覆砂丘（Cd）に分類される。

本報告書に掲載する調査の行われた範囲は、標高10~20m程度の遺跡東側の史跡指定地周辺で、「山田野段丘面」と呼称される砂礫台地の中位面（Gt II）にあたる。ここでの構成層は「山田野層」と呼ばれ、水平層理の発達した10m強の砂層で、ところにより泥炭混じりの砂層や礫層を挟む。これらの段丘構成層を1~2m前後の層厚の火山灰層が覆う。現在これらの大半は畠地となっている。また、遺跡の南側は現在水田になっている。低湿地（谷底平野）を挟んで隣接する台地周辺に位置する亀ヶ岡遺跡も同様な地形面上に位置している。

遺跡西半は屏風山砂丘地の大半を占める被覆砂丘となっている。被覆砂丘の多くはクロスナ層、黒色火山灰層が挟在し、一部はローム質火山灰に覆われた古砂丘もある。

遺跡の載る台地の東側には、津軽平野が展開し、山田川流域にかけて三角州や後背湿地が展開している。現在、つがる市の大部分を占める津軽平野北部は江戸時代以後、弘前藩津軽家による「木造新田」などの開発による日本有数の広大な水田地帯を形成している。しかし、田小屋野貝塚の中心年代である縄文時代前期～中期の景観はこれとは異なり、集落の載る台地の東側には「古十三湖」が広がっていた（図3）。これは、約15,000年前の縄文時代の始まりと軌を一にして地球環境の温暖化が始まり、世界的な海面上昇が起り、海が陸域に広がった現象、「縄文海進」に起因している。これによって約9,000年前から、それまで深い谷底あるいは盆地であった現在の津軽平野北部に海水が浸入した（辻2015ほか）。諸説あるが、海進ピーク時の縄文時代前期の初めごろ（約7,000年前）には、

「古十三湖」の海岸線は現在のJR五能線の線路付近、五所川原駅～木造駅～陸奥森田駅～越水駅を結ぶラインをまで南下していた。それゆえ縄文時代の人々は、「古十三湖」を囲む岩木山北麓と屏風山砂丘台地上に集落を営んだのである。

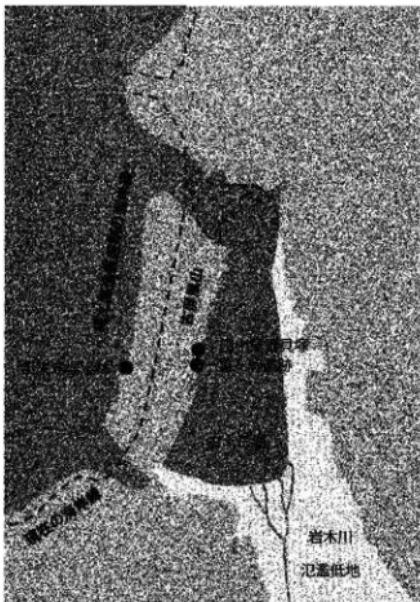


図3 つがる市周辺の縄文海進（『つがる市の環境変遷と縄文遺跡』（2015）より）

第4節 調査の方法

1. 調査区の設定

田小屋野貝塚発掘調査では、主に直線的にトレーニングを設定して調査を実施した。平成24年度A・Bトレーニングでは国土方眼座標に合わせて5m×5mの正方形グリッドを設定し、地上作物や立木等を避けて調査区を設定したが、その他の調査地点では地形等に合わせて任意の方向にトレーニングを設定したため、国土方眼座標のラインとは一致していない。

平成20年度は史跡西側隣接地に2ヶ所（A・Bトレーニング）、平成21年度は史跡北西側隣接地に3地点5ヶ所（A・B・Cトレーニング）、平成23年度は史跡北東側隣接地に10ヶ所（TR-1～10トレーニング）、平成24年度は史跡内外に5ヶ所（A～Hトレーニング）、平成25年度は史跡西半部に14ヶ所（T-1～14トレーニング）と遺跡西端部に2ヶ所（TR-1・2トレーニング）、平成26年度は史跡東半部に9ヶ所（TR-1～9トレーニング）と史跡北東側隣接地に10ヶ所（TR-1～3、T-1～7トレーニング）、平成27年度には史跡北東側隣接地に1ヶ所のトレーニングを設定して調査を実施した（図3）。

2. 表土の掘削及び遺物包含層の調査

史跡周辺の範囲内容確認調査では一部重機によって道路舗装や耕作土・擾乱層を掘削したが、それ以外は人力による掘削とした。包含層の遺物は層位別に取り上げ、必要に応じて遺物の出土状況写真撮影や、ドットマップ作成等を実施している。

3. 遺構の調査

遺構番号については、その属性に関係なく、トレーニングごとに連番を付していった。遺構の調査は、調査目的が遺跡の範囲内容確認調査であることから掘削を最小限にとどめた。また確認段階で掘り込み面や年代、性格が分かったものはあえて掘削せず、不明なものも基本的に半裁して確認するにとどめた。遺構は半裁または土層観察用ベルト等を設定して土層を観察しながら掘削し、土層写真の撮影及び土層観察図の作成をおこなった。遺物は、出土層位別に取り上げ、必要に応じて写真撮影やドットマップ及び微細図を作成した。焼土・炭化物が出土した際には、遺物と同様の処置を行った。

4. 図面作成

遺構平面図は1/20の縮尺で作成し、微細図は1/10、ドットマップは1/10または1/20で作成。遺構や調査区の土層断面図は1/10・1/20の縮尺で作成した。

5. 写真撮影

平成20～23年度は35mm一眼レフカメラを用い、カラースライドフィルム（ISO100）とカラーネガフィルム（ISO400）で撮影した。平成24年度以降はデジタル一眼レフカメラを用いて撮影した。なお、報告書掲載遺物写真的撮影には、デジタル一眼レフカメラを用いた。



第2章 過去の調査の概要

第1節 明治から昭和初期の調査

東京帝国大学の佐藤傳藏は、明治29（1896）年5月に亀ヶ岡遺跡の第2次調査時に、田小屋野貝塚の調査を行った。その調査によって、田小屋野貝塚では黒色土の下のローム層（洪積世後期に堆積）から多量の土器が出土したことをヨーロッパと対比し、洪積世後期での土器の有無や磨製と打製の石斧の違いなどの検討を行った（佐藤1897）。

大正14（1925）年には、東北帝国大学の山内清男が現地を踏査し、遺物を探集したことを『史前学雑誌』に報告（山内1929）している。

昭和3（1928）年には、中谷治宇二郎が東北地方の遺跡を調査した。その中で、三戸郡是川（現在の八戸市・王寺（1）遺跡）や上北郡貝塚（現在の七戸町ニツ森貝塚）などとともに円筒上層式土器が出土する遺跡の一つとして本貝塚を挙げている。また、佐藤傳藏の説をもとに、亀ヶ岡遺跡よりも年代が古いことを推定した（中谷1929・1935）。

その後、昭和9年に旧西津軽郡館岡村から、亀ヶ岡遺跡とともに史跡指定の申請書が提出され、10年後の昭和19年6月26日に史跡に指定された。官報に掲載された指定説明には「亀ヶ岡ノ北数町ヲ隔テタル台地ニ蜆貝ヲ主トセル貝塚アリ繩文土器及石斧、鍬石、石鏃等ヲ発見シ地方著名の遺蹟ナリ」とある。

第2節 平成の青森県立郷土館による調査

平成2・3年度には、青森県立郷土館が史跡に隣接した西側の発掘調査を実施した（福田・工藤1995）。これは、第二次大戦中に史跡指定されたものの、増産供給のため肥料として貝塚を田圃に運搬し、遺跡の破壊が進んだことが指摘されたことや、戦時中はもとより戦後になっても発掘調査が行われず、畠地化や土取りが懸念されたことによるものだった。

（1）検出遺構

2ヶ年にわたる調査で、竪穴建物跡が1棟検出された。T字状にトレントを入れ、竪穴建物跡の2/3ほどが調査された。平面形は北東-南西に長軸をもつ楕円形で、規模は長軸約5m、短軸約4.5mである。壁は外傾して立ち上がり、深さは35cmほどである。床面中央南寄りには炭化物が広がり、炉とみられる。また、床面中央や北側からは深さ29cmのピットが1個検出された。この竪穴建物跡は、床面直上の出土土器から繩文時代前期中葉頃の深脚田式～円筒下層a式期と考えられる。

第1号建物跡の堆積土の上部（第II層）は、ヤマトシジミを主体とする混土貝層で、下部（第III層）には黄褐色土、さらにその下位の床面直上には炭化物混じりの褐色土層（第IV層）が堆積する。混土貝層からは、動物遺存体、土器、石器、骨角器、貝製品が出土したが、個体復元可能な土器やクジラ・イルカ・アシカ等の海獣骨は、その中でも下部にまとまった状態で出土した。建物跡を埋めた黄褐色土の上に大型の土器類と獸骨を廻棄し、さらに貝類の廻棄がなされたと考えられる。出土土器は円筒下層b式が主体で、貝層も同時期と考えられる。なお、下位の第III・IV層からの出土遺物は少

数である。

(2) 出土遺物

出土遺物のうち、土器は深郷田式～円筒下層b、土器が主体であるが、前期末葉（円筒下層d₁式）や中期（円筒上層a・d・e式、棱林式、最花式）もある。石器では、石鎌、石槍、石匙、磨製石斧、半円状扁平打製石器、抉入扁平磨製石器、敲磨器類、石錐などがある。黒曜石の多くは出来島産であるが、赤井川産など北海道産のものも含まれる。土・石製品では、ミニチュア土器や土器片利用円板が出土したほか、片岩製の装身具が採集されている。

動物遺存体では、調査の際に目視で確認し取り上げされた資料とブロックサンプルに1mmメッシュ水洗選別を実施した資料から、貝類13、魚類17、両生類1、は虫類1、鳥類7、哺乳類11の分類群が確認された。貝類は、ヤマトシジミが全体量の9割以上を占め、イシガイがこれに次ぐ。この他、オオタニシ・マルタニシ・カラスガイ類が含まれており、ハマグリ・サルボウ類・マガキもごく少量みられた。鹹水性の貝類もみられるが、汽水～淡水性の貝類が大半を占める。

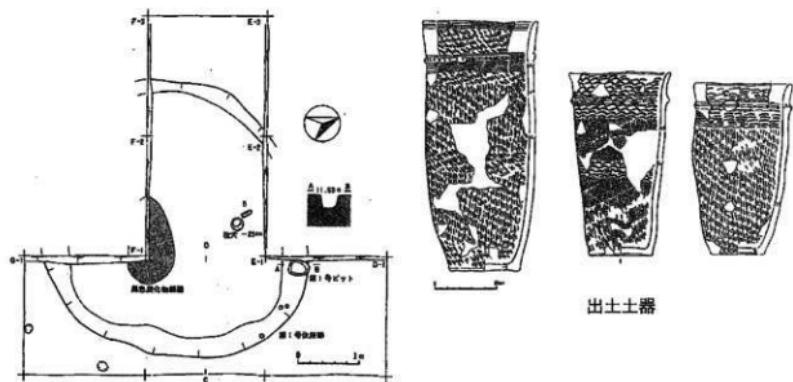
魚類は、コイ科とサバ属が最も多く、ニシン科・サケ属・ブリ属・ウミタナゴ科・ソウダガツオ属も普通にみられた。体長20～30cmほどの小型魚が大半を占めており、大型魚は少ない。比較的大型の個体としてはスズキ属・サケ属および一部のコイ科があり、スズキ属とサケ属はすべて中～大型の個体で占められる。

鳥類は、ガン・カモ類が最多で、オオハクチョウとコガモ、コガモより少し大型のカモ類が含まれる。次いで多いのはアホウドリで、ウミガラス、カラス類、カツブリ類もみられた。オオハクチョウとカモ類は越冬のため南下した個体、アホウドリは夏季に飛来した個体が捕られたものとみられ、夏と冬の両時季に鳥獣が行われていたことがわかる。

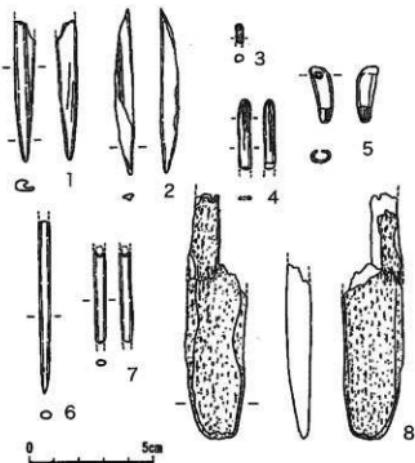
哺乳類は、トド・アシカ・イルカ類・クジラ類など海獣類が多く、陸獣骨は、ノウサギがやや多い。縄文時代の貝塚に一般的なシカ・イノシシが出土しておらず、大型陸獣ではカモシカが出土していることも特徴的である。

骨角器は刺突具、釣針、骨針、装身具、骨匕、骨べら、牙製垂飾品など14点が出土した。刺突具（図5の1・2）は一端が鋭利に研磨されたもので、陸獣骨と鳥骨の四肢骨を素材としている。釣針（3）はチモトの破片と考えられるもので、被熱により白く変色している。骨針（4・6・7）は、一端が鋭利に加工され、基部に縦長の穿孔がみられる。装身具は、鳥類の長管骨を素材とし、骨端部を切断・研磨したものである。垂飾品とされるが、針入れの可能性もある。この他、陸獣骨を素材とする骨匕、鯨骨を素材とする骨べら（8）、イルカの遊離歯に穿孔を加えた牙製垂飾（5）も出土している。

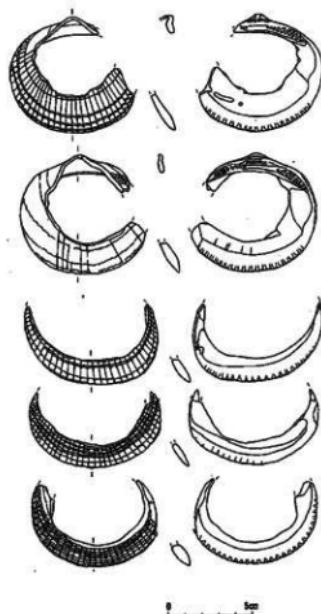
ベンケイガイ製貝輪は約60点出土した。中央が打ち欠きにより穿孔されているが、いずれも研磨されておらず、全て加工途中で破損した失敗品と考えられる。また、貝殻の表面には、顕著な水磨痕がみられ、海浜に打ち上げられた死殻が利用されていたと考えられる。この他、カズラガイの口唇部片や水磨を受けて薄く板状に磨減したベンケイガイの破片も出土しており、食用とは異なる目的で様々な打ち上げ貝が集落内に運びこまれていた様子がうかがえる。



第1号竪穴建物跡



骨角牙器（刺突具・釣針・骨針・骨ヘラ・装身具）



ベンケイ貝製貝輪

図5 平成2・3年度の県立郷土館による発掘調査

第3章 平成20～27年度の調査

第1節 調査の目的

平成20年度以降の調査は、遺跡の範囲や内容を確認するため、史跡内外の遺構の分布状況などを確認することを目的として国庫補助を活用し、調査を実施した。

平成20年度は史跡西側隣接地、平成21年度は史跡北側隣接地を対象に調査を行った。平成23年度は遺跡内への上下水道敷設計画に伴い史跡北側の試掘調査を行った。平成24年度からは、調査が行われていなかった史跡内について、将来の史跡の保存・整備に資することを目的とし、貝層や遺構の分布状況を確認するための試掘調査を実施した。平成24年度は史跡北側と史跡南西隣接地、平成25年度は史跡西側、平成26年度は史跡東側を調査対象とした。平成27年度には史跡北東側隣接地を対象に試掘調査を行った。また、平成27年度にはこれらをまとめた総括報告書を刊行することとした。

第2節 基本層序

これまでに報告された中での基本層序は以下のとおりである。

県立郷土館の調査では地山ローム層の上部まで4層に大別され、さらに第Ⅰ層は2細分された。第Ⅱ層が混土貝層で、縄文時代前期の遺物を主体とし、上部にはそれ以降の時期の遺物も含まれる。なお、第Ⅱ層以下は竪穴建物内に堆積する層である（青森県立郷土館1995）。

平成20・21年度のつがる市の調査（田小屋野貝塚2）では、地山ローム層の上部まで10層に分層された。V層が縄文時代中期後～末葉の盛土層、VI層が縄文時代中期初頭～後葉の遺物包含層、VII層が縄文時代前期末葉から中期初頭の堆積層、VIII層が縄文時代前期の遺物包含層である（佐野2010b）。

平成23年度のつがる市の調査（田小屋野貝塚3）では、地山ローム層の上部まで4層に分層された。Ⅲ層が縄文前～中期の円筒土器文化期の遺物包含層である（佐野2012）。郷土館調査の第Ⅱ層、平成20・21年度のつがる市の調査のV～VII層、平成23年度のつがる市の調査のⅢ層が時期的におおむね対比できる。

県立郷土館調査
(第Ⅲ層以下は竪穴建物内に堆積する層)

第Ⅰ層	黒褐色土、軟土・耕作土。
第Ⅱ層	暗褐色土、軟土。
第Ⅲ層	黒褐色土、多くを含む。縄文時代中期の遺物が主。上部にはそれを以降のものも混入。
第Ⅳ層	黄褐色土、ローム土の塊で、炭化物が認められる。遺物はきわめて少數(深部由文～円筒下限)。
第Ⅴ層	褐色土、竪穴建物跡表面上の薄い層。
第Ⅵ層	ローム層。

つがる市調査(田小屋野貝塚2)

I層	耕作土。
II層	近年の盛り土。
III層	近年の盛り土下の細耕作土。
IV層	暗褐色～黒褐色土、平安時代以後の堆積層。
V層	暗褐色～黒褐色土、ローム土が混じる縄文時代中期後～末葉の盛土層。
VI層	暗褐色～黒褐色土、縄文時代中期初頭～後葉の遺物包含層。
VII層	褐色土、縄文時代中期末葉から中期初頭の堆積層。H21年度A-レジ1区のみで確認。
VIII層	縄文時代中期の遺物包含層。H21年度のA-レジ1・3区、C-レジ1で確認。
IX層	黒褐色土、無遺物層。
X層	地山とその上部との遷移層。
XI層	ローム層、地山。
(以下地)	

つがる市調査(田小屋野貝塚3)

I層	軟土。
II層	褐色土。
III層	暗褐色土、縄文時代中期末葉から中期初頭の堆積層。H21年度A-レジ1区のみで確認。
IV層	地山とその上部との遷移層。
V層	ローム層、地山。

第3節 史跡の内容確認調査

第1項 人骨出土地点（平成24年度Aトレンチ）

1. 調査概要

標高12.5～13mの史跡北東部を東西10m×南北7mで、土層観察用ベルトを残し立木を避けながら、約50m²を調査対象とした。24年度の調査でAトレンチと呼称した。竪穴建物跡（A-1・4号）、土坑墓（A-2・3・5号）などが確認された（図6～8）。そのうち、土坑墓のA-2・3号は半裁し、A-5号では人骨が出土したため、精査し取り上げた。

2. 層序

I層：表土。

II層：暗褐色土。ローム粒、炭化物粒多量。耕作土か？

III層：暗褐色土。混入物はII層に似る。II・III層ともガラスやビニールなどが含まれる。

IV層：黒褐色土。ローム粒、炭化物粒混入。

V層：黒褐色土。ローム粒多量。粘土質。層上部から円筒下層式土器出土。

VI層：褐色土。漸移層。

VII層：褐色土。地山。

3. 遺構

6基の遺構を検出した。遺構から出土した土器は円筒下層a・b式であり、遺構の時期も同時期のものと推定される。およその規模が推定できる竪穴建物跡（A-1号）は径5.5mで、床面は平坦である。半裁した土坑墓（A-2・3号）は長軸2～2.2mで、短軸は0.9～1.4mと推定される。深さは0.1～0.15mと浅い。また、A-5号土坑墓1体分の人骨は、A-1号竪穴建物跡堆積土内のヤマトシジミを主体とする貝層下から検出されたものである。地表下約20～30cmのところで、上層の貝のブロックにより、幸いにも残存したものである。土坑墓の長軸は東西で、人骨は東頭位で右側臥屈葬の状態である（人骨の分析は第4章参照）。

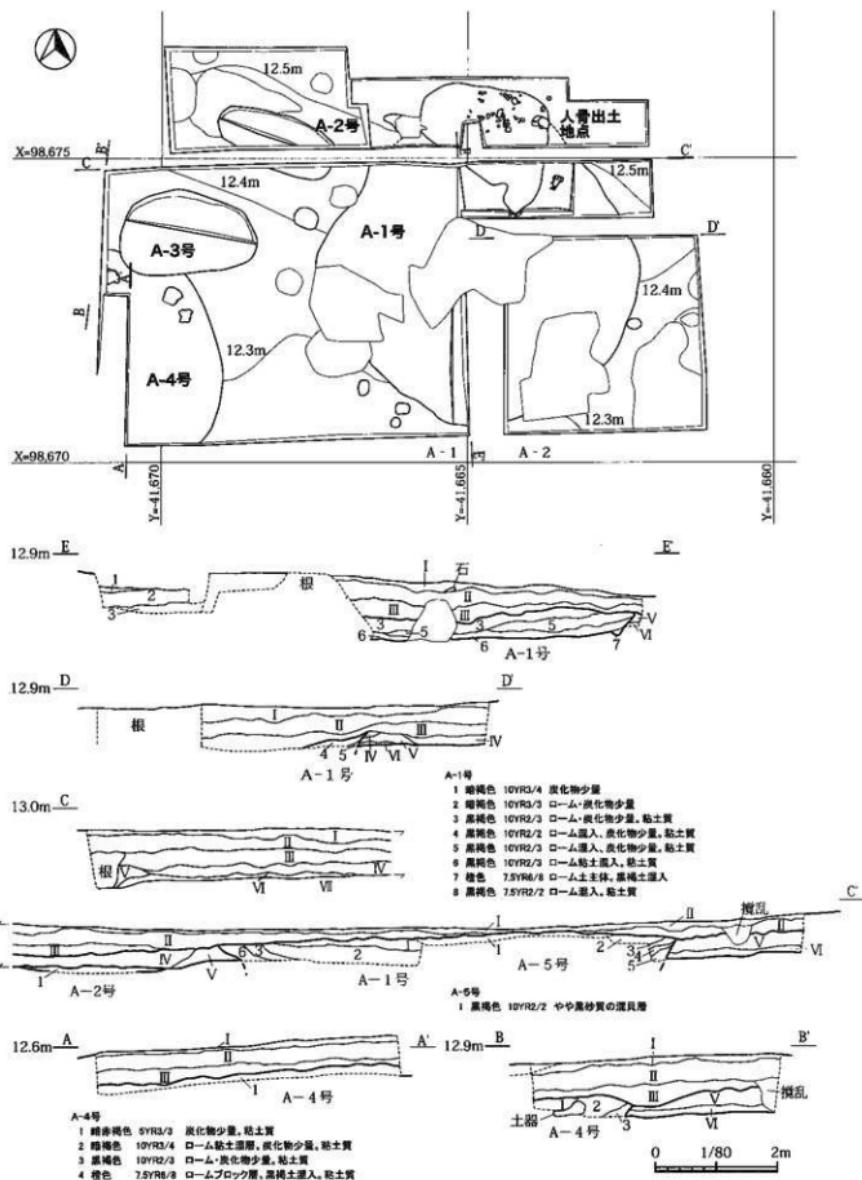
4. 遺物

土器は縄文時代前期中葉の円筒下層a・b式である。竪穴建物跡、土坑墓などから出土し、A-4号竪穴建物跡では復元個体が出土した。A-5号では円筒下層a・b式土器片のほか、ベンケイガイの破片も出土した。

図9はAトレンチから出土した土器で、円筒下層a・b式土器が主体である。

1～6は遺構内から出土した土器である。口縁部は直立するものと、やや外反するもの（8・11）がある。文様帶には結節回転文や縄文が施される。7は地文施文後に口縁部から胴部にかけて大ぶりで浅いX字状の沈線が施された土器である。また、口唇端部がやや内削ぎ状になるもの（6・9）がある。頸部は隆帯があるものとないものがあり、あるものでは断面が三角形状のもの（1・2・6）や、上面が平坦で胸部側に向かい薄くなり直角三角形状のもの（3・5・9）がある。4・10は隆帯の上面まで胸部と同じ縄文の施文が及ぶ。胴部には縄文が施される。なお、3には内面下部と外面上部に炭化物が付着し、煮炊きの痕跡を示すものである。

A-4号竪穴建物跡から出土した土器（3・4）は、口縁部から胴部あるいは底部まで接合したものである。



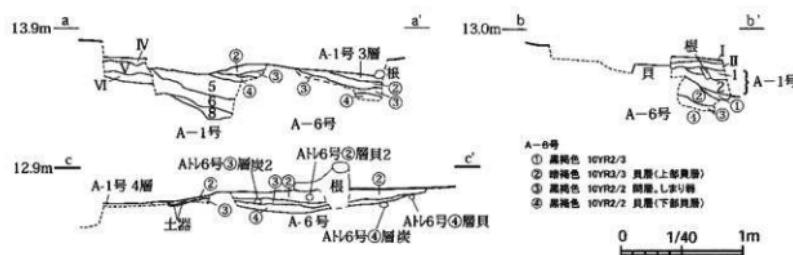
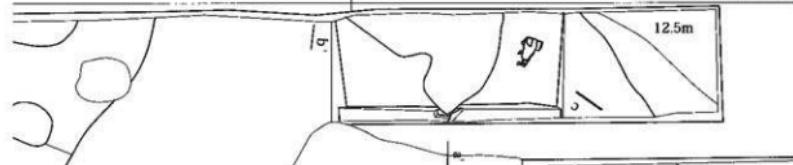
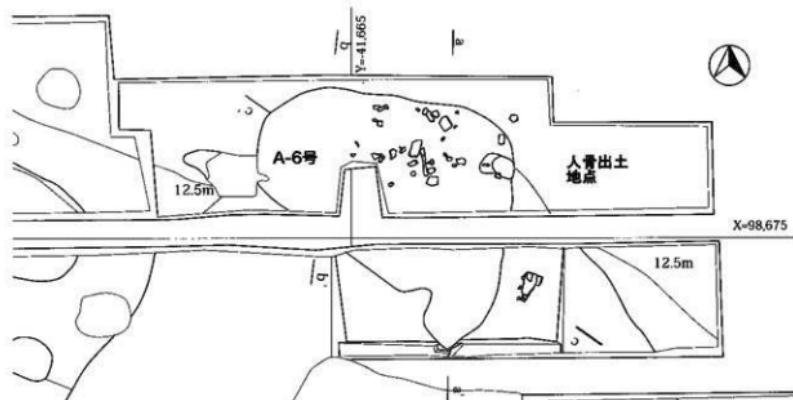
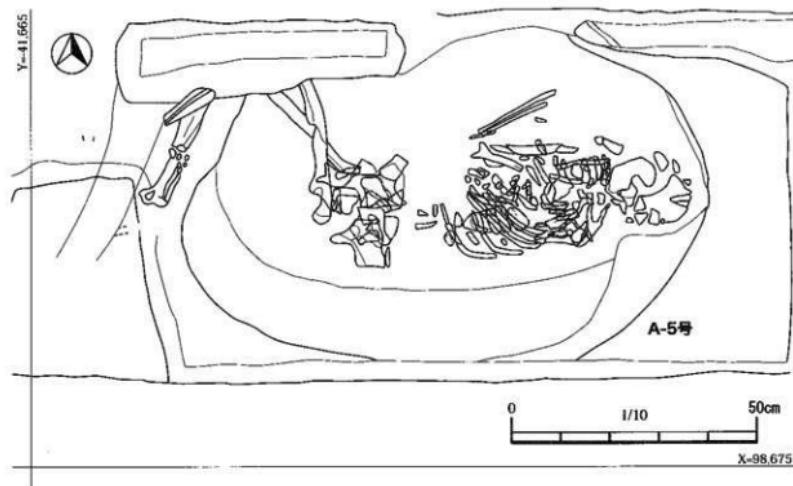


図7 人骨出土地点平面図・セクション図

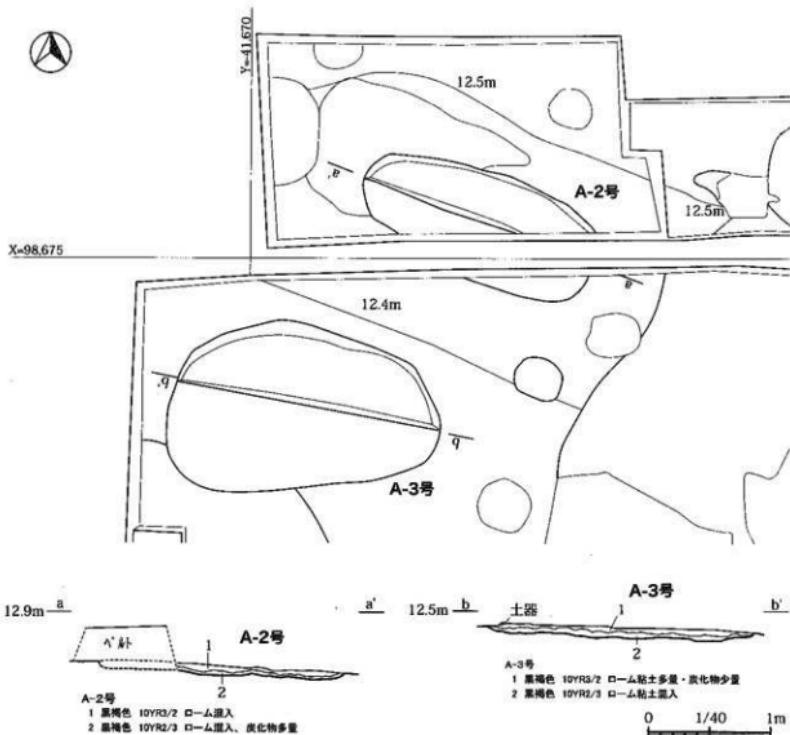


図8 A-1号・A-2号 平面図・セクション

図10・11はAトレンチから出土した石器である。

A-1号竪穴建物跡からは、石鎌・石匙・半円状扁平打製石器・磨石・石錐・砥石等が出土した。5はほぼ全面に黒色付着物が認められる砥石である。A-3号土坑墓からは、磨石・磨製石斧等が出土した。7は玉鈴円礫の縁辺部に磨滅痕が認められる磨石である。Aトレンチの遺構外からは、石鎌・石匙・半円状扁平打製石器・磨製石斧・磨石・石錐・石皿・軽石製品等が出土した。

遺構内外とともに剥片石器の素材は珪質頁岩が主であるが、石鎌や石匙の一部に玉髓が利用される。

表1 Aトレンチ 遺構一覧表

No	遺構番号	種別	年代
1	A-1号	竪穴建物跡	縄文前期中葉
2	A-2号	土坑(墓)	縄文前期中葉
3	A-3号	土坑(墓)	縄文前期中葉
4	A-4号	竪穴建物跡	縄文前期中葉
5	A-5号	土坑(墓)	縄文前期中葉
6	A-6号	竪穴建物跡	縄文前期中葉

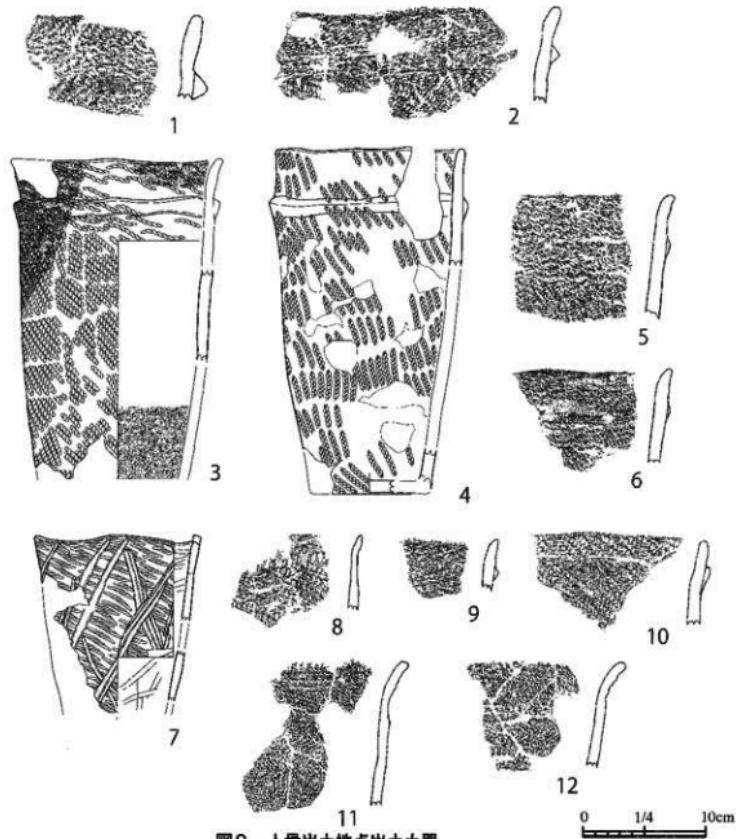


図9 人骨出土地点出土土器

表2 人骨出土地点出土土器観察表

番号	種別	器形	部位・形状	出土位置	出土層位	年代	型式・石材	備考
1	縄文土器	深鉢	口縁	A-1号	3層	縄文前期	円筒下層b	
2	縄文土器	深鉢	口縁	A-1号	2層	縄文前期	円筒下層a～b	
3	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A-4号	1層	縄文前期	円筒下層a～b	
4	縄文土器	深鉢	口縁～底部	A-4号	2層	縄文前期	円筒下層a～b	
5	縄文土器	深鉢	口縁	A-5号	—	縄文前期	円筒下層a～b	
6	縄文土器	深鉢	口縁	A-6号	②層	縄文前期	円筒下層a～b	
7	縄文土器	深鉢	口縁	A-1グリッド	Ⅲ層	縄文前期	円筒下層aかb	
8	縄文土器	深鉢	口縁～胴部	A-1グリッド(東)	Ⅱ～Ⅲ層	縄文前期	円筒下層b	
9	縄文土器	深鉢	口縁	A-1グリッド(西)	V層	縄文前期	円筒下層a～b	
10	縄文土器	深鉢	口縁	A-1グリッド	Ⅱ層	縄文前期	円筒下層b	
11	縄文土器	深鉢	口縁	東側	遺構確認面	縄文中期	円筒上層a	
12	縄文土器	深鉢	口縁	東側	遺構確認面	縄文中期	円筒上層a	

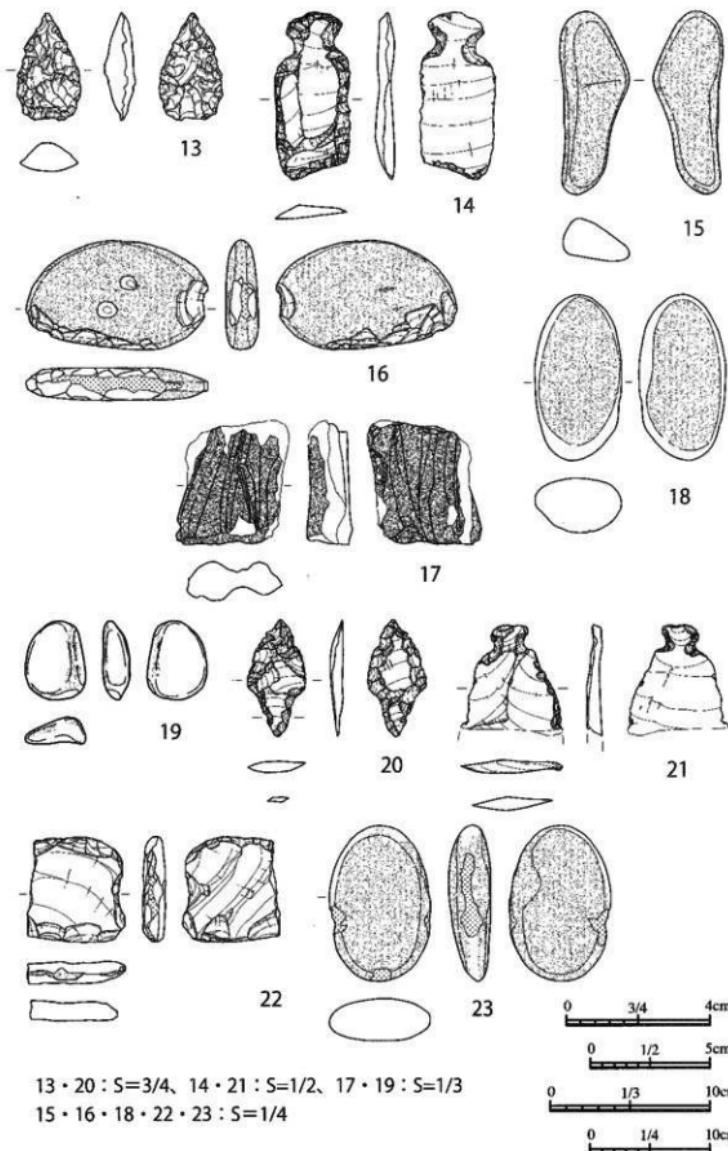
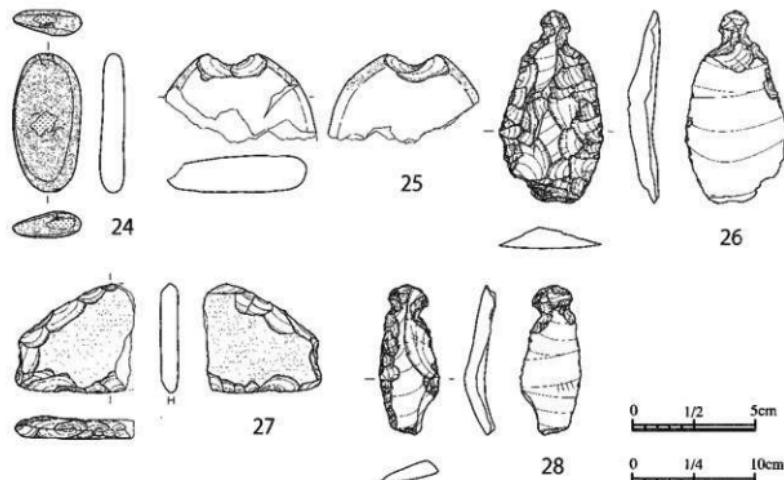


图10 人骨出土地点出土石器（1）



26・28:S=1/2、24・25・27:S=1/4

図11 人骨出土地点出土石器(2)

表3 人骨出土地点出土石器観察表

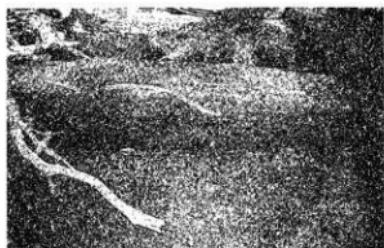
番号	種別	器形	部位・形状	出土位置	出土層位	年代	型式・石材	備考
13	石器	石鎌	—	A-1号	—	縄文	玉髓	
14	石器	石匙	縦型	A-1号	上層	縄文	珪質頁岩	
15	石器	磨石	—	A-1号	暗褐色下層	縄文	安山岩	
16	石器	磨・敲石	—	A-1号	南北サブトレ内	縄文	安山岩	
17	石器	砥石	—	A-1号	上層	縄文	流紋岩	付着物あり
18	石器	磨石	—	A-1号	—	縄文	安山岩	
19	石器	磨石	—	A-3号	1層	縄文	玉髓	
20	石器	石鎌	—	A-1グリッド北サブトレ	暗褐色層	縄文	珪質頁岩	
21	石器	石匙	縦型	A-1グリッド	—	縄文	玉髓	
22	石器	半円状扁平打製石器	—	A-1グリッド	—	縄文	安山岩	
23	石器	磨・敲石	—	A-1グリッド	II層	縄文	安山岩	
24	石器	磨・敲石	—	A-1グリッド	—	縄文	安山岩	
25	石器	石鎌	—	A-1グリッド(南拡張)	I層	縄文	安山岩	
26	石器	石匙	縦型	A-2グリッド(東半)	IV層最上部	縄文	珪質頁岩	
27	石器	半円状扁平打製石器	—	A-2グリッド(南拡張)	I層	縄文	安山岩	
28	石器	石匙	縦型	A-2グリッド(東拡張)	II～III層	縄文	珪質頁岩	



A レンチ調査地点(南から)



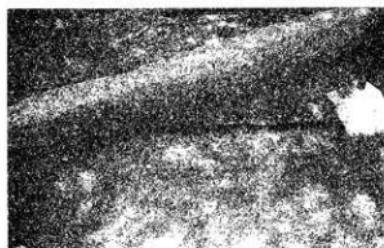
A レンチ1号(南東から)



A レンチ1号土層断面(西から)



A レンチ2・3・4号(北西から)



A レンチ2号土層断面(北から)



A レンチ3号土層断面(北から)



A レンチ4号土器出土状況(南から)

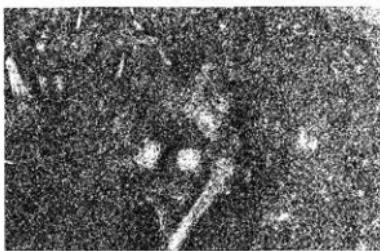


A レンチ5号人骨検出作業(北から)

写真2 人骨出土地点調査状況①



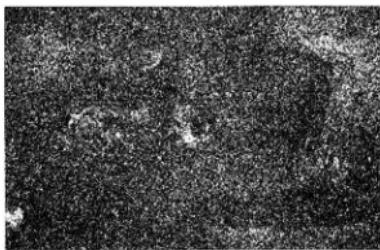
A レンチ5号人骨検出状況(西から)



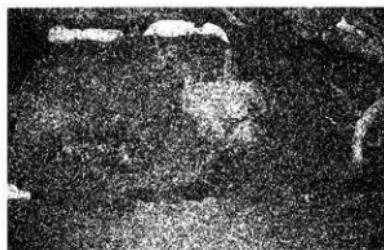
A レンチ5号人骨下半部検出状況(西から)



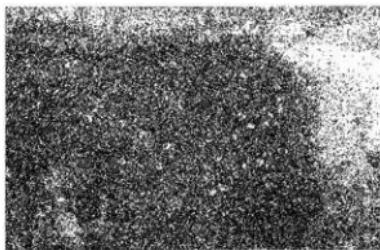
A レンチ5号人骨左足検出状況(北から)



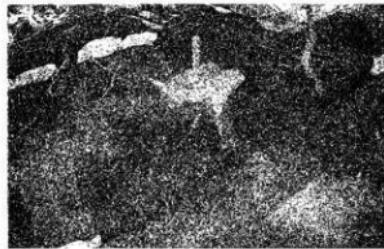
A レンチ5号人骨下部・右足検出状況(北から)



A レンチ6号貝層分布状況(北から)



A レンチ6号貝層分布状況(北から)



A レンチ6号貝層断面(北東から)



A レンチ6号ペンケイガイ・土器出土状況(南西から)

写真3 人骨出土地点調査状況②

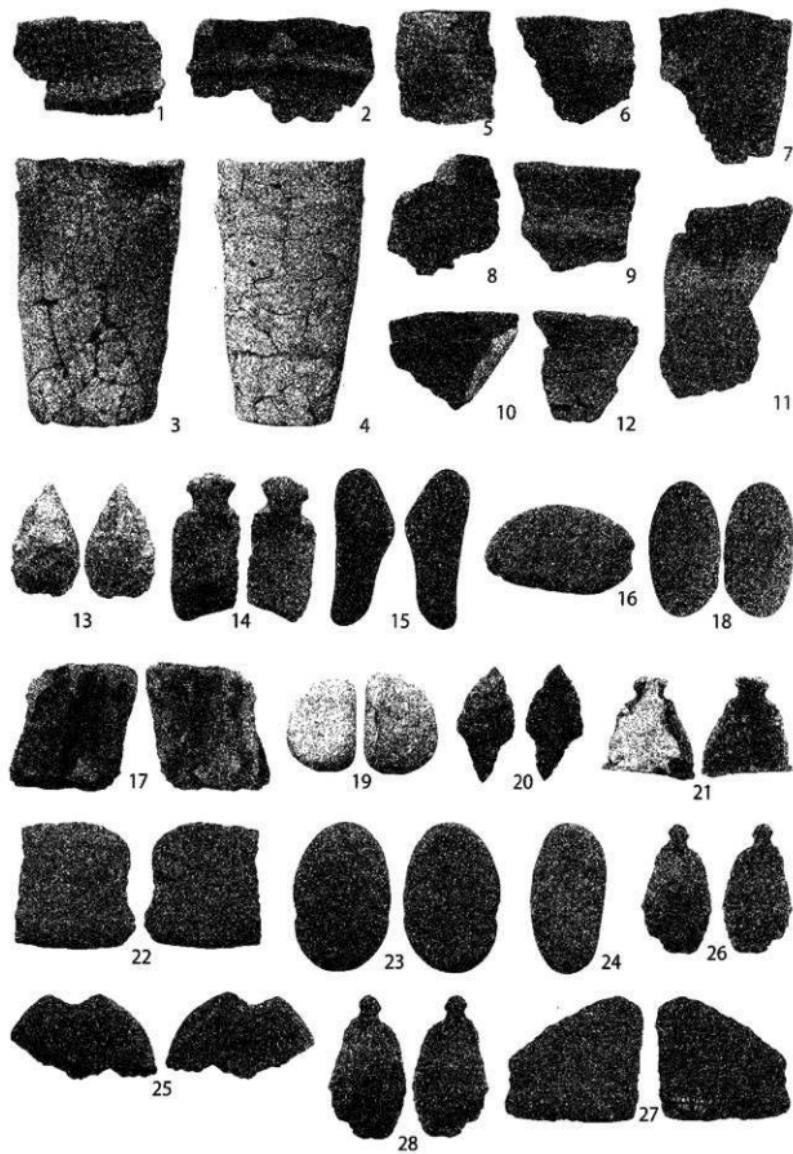


写真4 人骨出土地点出土遺物